

## 契丹国(遼朝)時代の考古資料について

武田和哉(奈良市教育委員会)

はじめに

契丹国(遼朝)<以下、契丹国と略記する>は、10世紀から12世紀にかけて、北東アジア世界に版図を維持していた国家である。建国当初の国号は契丹であったが、のちに遼にかわり、また契丹に戻って、更に遼となり、末期まで使用される。

契丹国を、伝統的中華王朝としてみるか、あるいは北アジア的な遊牧国家としてみるかについては、以前より多く議論がなされてきた。

近年、主として中国国内での発掘調査の進展や盗掘の摘発等により、墓誌資料や考古資料を中心に発見・報告が相次いでいる。

### 1. 契丹国(遼朝)の考古資料とその概要

ここでは、契丹国に関する考古資料について、主として遺構と遺物に大別して概要を記すことにする。契丹国以前、あるいは滅亡以後の契丹人に関する考古資料については、今回は原則として割愛した。

#### (1) 遺構関係

a. 陵墓 近年、契丹国の陵墓が多く発見され、その調査報告が多く出されてきている。契丹国時代の陵墓には、故人の遺骸を入れた棺、副葬品、そして故人の事績を記した墓誌(哀册)が収められている。また彩色した壁画が伴うことも多い。ただし、最近盗掘が横行し、大半の陵墓ではこうした遺物が持ち去られていることが多いという。主要な発見・調査としては以下のものがある。

陵墓の築造に関しては、主として中国の土木技術を採用して、磚積みのドーム状の墓室を構築している例がかなり多く見られる。羨道の構築手法なども同様である。また、壁画については、唐代墓の影響が大きいものとみられる。

fig.2 モンゴル国内の契丹国(遼朝)代・金代の遺跡分布図〔白石典之 2001 より〕

慶陵(聖宗・興宗・道宗各皇帝及び各后妃の陵墓群) 巨大な石室・精緻な壁画・各皇帝皇后の哀册

遼寧省建平県・新民県契丹国時代墓 馬具・陶磁(「官」銘白磁含む)・銅鏡など多彩な副葬品

内蒙古自治区哲里木盟陳國公主墓 公主夫妻の遺骸・副葬品・墓誌

河北省宣化県漢人壁画墓 壁画(天文図のある壁画を含む)・副葬品・墓誌

内蒙古自治区赤峰市耶律羽之墓 契丹国初期の皇族墓・副葬品(帯金具・「左相公」銘銀盆・錦布等)・墓誌

b. 都城 契丹国には五京(上京・中京・西京・東京・南京)と呼ばれる都市が存在し、それぞれ地域の統治、防衛、交易等の諸活動の拠点となっていたとみられる。

これらの都市の遺跡は、南京を除くと、現在でも城壁等が残存している例が多くみられ、中には城内に土壇のような遺構の跡を確認出来る例もある。また、モンゴル国内では、いくつかの土城も確認されていて、地方行政の拠点に比定されるものもある。主要な調査としては、下

記のものがある。

上京城 五京の一つ(臨〔水+黄〕府) 周囲約9kmの都城 北側の皇城と南の漢城に分かれる  
中京城 五京の一つ(大定府) 東西約4.2km 南北約3.5km 内部に寺院塔の建築残存  
祖州城 皇族耶律氏発祥の地 外城東西0.6km 南北300km 門・土壇等の残存良好  
慶州城 慶陵の奉陵邑 東西1.55km 南北1.7kmの方形 白塔あり  
鎮州城 モンゴル国ボルガン県内の土城 南北約1250m 東西約650mの長方形 内郭あり  
このほか、モンゴル国内では方形の郭を持つ土城が多数存在する。

c. 寺院 契丹国は、中期以降に佛教が伝来して、興宗の代頃より皇帝の帰依を受けて盛況を呈した。特に仏塔は多く造営され、現在でも数多く残る。大半は磚造りの簷塔と呼ばれる形式であるが、中には應県佛宮寺のように木造塔もある。また石窟もいくつか見ついている。主要な遺跡・調査は下記の通りである。

山西省應県佛宮寺木塔 中華人民共和国内の最古の木造建築  
遼寧省義県報国寺大雄殿 契丹国時代の建築  
内蒙古自治区巴林左旗前後昭廟石窟 「十年動乱」で大被害  
北京市順義県浄光舍利塔 興宗時代の塔 簷塔としては契丹国時代中最初期の塔か？  
鎮壇具出土  
遼寧省瀋陽市白塔 道宗時代の塔 大量の宝物

d. 窯・その他 契丹国の領域内では、遼三彩などに代表されるような陶磁器を生産しており、そうした窯跡遺構が見ついている。主として、五京と呼ばれる都城遺跡の郊外から発見されている。ただし、これら陶磁器以外にも、日用雑器として灰色無釉土器(陶質)が作られていた。主要な窯業遺跡の例は下記の通りである。このうち、赤峰市喀喇沁左旗猴頭兒溝乾瓦窯(缸瓦窯)については、契丹国の官窯に比定する意見がある。

内蒙古自治区林東山窯 上京の北郊外 白磁碗・皿 黒磁 白地+緑釉(磁州窯の影響か)  
内蒙古自治区林東南山窯 上京の南郊外 緑釉・褐釉・白釉 契丹国後期か  
内蒙古自治区林東白音戈勒窯 上京の南西 黒釉の粗器生産  
内蒙古自治区赤峰市喀喇沁左旗猴頭兒溝乾瓦窯(缸瓦窯) 中京と関係深い 白地陶磁(刻花・彩花) ・黒褐釉陶磁・三彩等 食器類 装飾技法が多様であり、生産量も多い  
遼寧省遼陽市缸官屯窯 東京と関係あり 白地透明釉 黒釉または黒褐釉薬 皿・鉢・壺  
遼寧省撫順市大官屯窯 東京と関係あり 黒褐釉 壺・甕・碗 日常雑器か？  
北京市門頭溝区龍泉務窯 南京郊外 白磁 青磁 碗・皿・盤 定窯系の影響あり！？

このほかに、モンゴル国オノン河流域、中国内蒙古自治区呼倫貝爾盟北部、中国・ロシア国境アルグン河沿いに現在も残存する通称「チンギス=カン長城(嶺北長城)」は、従来では金代の

界壕とする説が有力であったが、近年の調査により契丹時代の築造とする見解が出されている。また、モンゴル国内の調査では、岩肌に契丹文字を墨書している例など新たな遺跡も発見されている。

## (2) 遺物関係

a. 墓誌・哀册 皇族の陵墓のほか、貴族・官僚クラスの墓にも墓誌が入れていることが多く、被葬者に関する情報や埋葬の年代など多くの情報を得る手がかりとなる。なお、慶陵から出土した皇帝・皇后の墓誌には、特に「哀册」という名称が使用されていた。

契丹国代の墓誌・哀册の形式は、構造上は中華王朝にみられる墓誌と基本的にほとんど異ならない。大まかな傾向として、皇帝・皇后のものが最も大きく、慶陵出土のもので概ね1.3m前後あり、次いで皇族・国舅族クラスの順にサイズが大きいうような様相が見て取れる。あるいは葬送上の規定などがあったものと想定できる。装飾様式についても、中華王朝のものと酷似しており、十二支像を象った装飾例などがみられる。

### 編年案の時代区分

- 第一期 契丹国太宗会同年間〔938〕～聖宗太平年間〔1031〕
- 第二期 契丹国興宗重熙年間〔1032〕～道宗清寧年間〔1063〕
- 第三期 契丹国道宗咸雍年間〔1065〕～契丹国滅亡時期〔1125〕
- 第四期 金国太宗天會年間〔1126〕～13世紀前半頃

b. 土器・陶磁器 陵墓から出土する副葬品や窯跡灰原の出土品などを見ると、白磁・青磁・単彩(緑釉・黒釉)などの陶磁器に加えて三彩もみられ、高級品としての陶磁器の流通が確認できる。形態的には、中華王朝においてよく見られる器種のほかに、契丹特有の器種として鶏冠壺などの例もみられる。これは、遊牧生活において騎乗の際に使用していたであろう革袋を象ったものである。

近年、北京郊外で発見された龍泉務窯の調査から、陶器の編年なども提示されるようになってきており、今後窯跡の調査による資料追加が期待されている。

また、日用雑器については、窯はいくつかみついているが、概ね集落遺跡や都城遺跡の居住部分における調査事例・報告が比較的少ないために、日常の生活用の土器・陶磁器の

使用・廃棄の実態については、現状ではまだ様相が明確に把握できない。

c. 佛教関係遺物 契丹国の後半には、契丹版大蔵經の編纂など国家事業としての佛教保護も行われた結果、かなりの盛行をみた。出土する石刻史料の中には、造塔記や幢記などのものも多い。

近年の重要な発見としては、山西省應県佛宮寺木塔から出土した資料群、また内蒙古自治区慶州城内の釈迦仏舎利塔より出土した金板・銀板陀羅尼咒や木製彩繪仏舎利塔・經典をはじめとする資料群などが著名である。当時の契丹国の仏教信仰の様相を知る上で貴重である。

d. 副葬品・その他 副葬品としては、主として金属製品や玉製品などが多い。伝統的な遊牧文化の影響を受けたと見られるものと、中華王朝の影響の強いものと様々みられる。このほか、重要な遺物としては、印・牌・符などがある。出土状況については、後段で述べるが、文字情報に関しては歴史史料との校勘・分析により、行政組織や度量衡などの諸問題を考察する上で重要な手がかりともなる。

## 2. 考古資料に関する諸問題

### (1) 遺構関係

調査の実態として、陵墓の調査報告例が突出して多い状況にある。陵墓の調査は、最近では盗掘により緊急的に実施される例が増えており、近年では慶陵の陪陵が盗掘に遭い、それが契機となって複数の皇親の墓誌が発見されるなどのケースもあった。文物保護政面では不安な側面もある。

次いで都城に関する調査・報告例が多い。ただし、都城の場合は主として城郭部分が多く、内部では基壇や寺院関係遺構などが比較的調査対象とされている傾向にある。

このほか、窯業遺跡は物原の確認などからいくつか存在が把握されているが、本格的な調査が実施されている例は多くはない。また、集落遺跡や都城の居住区など生活に直結する調査はかなり少ないようである。

こうした遺跡種類上の偏りが少なからずあるということは、出土遺物の傾向にも少なからず影響を及ぼしている可能性もあり、留意すべきことのように思われる。

また、近年モンゴルを中心に、ロシアなどでも新たな知見が報告されつつある。これらの地域は、契丹国の領域としては周縁地域に該当しているが、土城などの遺構は比較的残存状況がよく、築造手法や年代の手かかりが得られる可能性があるほか、地方行政のネットワークや施設の整備状況、また契丹国後半期に懸案となる北辺防備体制を知る手かかりとなる可能性もある。

## (2) 遺物関係

陵墓の調査が大半を占めている関係で、墓誌・副葬品としての金属製品や陶磁器が顕著であるが、これらは中華王朝の影響を大きく受けているものが多く、比較研究が重要であるように思われる。特に文字情報を持つ遺物としての墓誌については、特に後段に別項を設けて詳述する。

土器・陶磁器については、概ね遺跡・遺構の年代を推測する上で大きな手かかりとなる可能性が高い遺物であるが、窯跡の調査や編年作業がまだ不十分で、今後の調査の追加によって、検討をしていく必要はあろう。また、流通の実態については未知な点が大半と言える。こうした問題は歴史史料では記述がほとんどなく、実態を追求することには限界があるので、考古学的調査による出土遺物の分析や統計的データの蓄積によって考察が進展することが期待されている。

## 3. 歴史史料と考古資料(出土文字史料)の比較・検討に関する諸問題

### (1) 墓誌・哀冊をめぐる諸問題

墓誌・哀冊は、被葬者の特定やその出自・親族関係・事績、そして埋葬時期など、多くの情報を得る手掛かりとして極めて注目される。しかしながら、大抵の場合は故人の過怠や不利益には言及しないのが通例で、概して華美な文言や修飾が含まれていることが多いと言える。よって、その記述・表現が全て事実であるかどうかという疑問や問題点を包含していることには認識する必要がある。

これら墓誌の記述は、『遼史』本紀および列伝や他の墓誌の記述から校勘できる場合があるものの、一定の限界がある。基本的にはそうした墓誌の記述上の傾向を認識しつつ、記載内容の扱い方には留意したい。

なお、ここでは、今までに見つかっている墓誌・哀冊の記述上の問題について、いくつか下記に列挙する。

a. 道宗皇帝の諱の問題 『遼史』、『契丹國志』では、道宗皇帝の諱は「洪基」と表記されており、しかも基本的には統一された表記である。しかし、慶陵より出土した「欽愛皇后哀冊」、「仁懿皇后哀冊」、「仁德皇后哀冊」においては、表記はすべて「弘基」で統一されている。こ

のように、皇帝の諱について、正史など基本資料と哀冊とでは異なるという事態は、かなり重大な問題として認識せざるを得ない。

こうした事態が発生している理由は定かではないが、陵墓に納める重要な遺物である哀冊の文面上において、皇帝の諱の表記を変える、あるいは錯誤する、という可能性・蓋然性は余り見当たらないように思える。さらには、道宗の弟と思しき耶律弘世なる者の墓誌が近年発見されるに至って、ますます歴史史料側の錯誤の可能性が高まっていると言えるであろう。仮に、もしも史料側の錯誤等であるとするならば、恐らく『遼史』、『契丹國志』など史料の編纂時に発生した可能性が考えられる。

ところで、最近の出土墓誌を概観すると、皇族、特に宗室の構成員と思しき者の事例がいくつかあり、またその中の記載から兄弟・親族内の氏名がいくつか見られるが、特に聖宗朝以降は、世代ごとに諱に共通の字を持つような中華的な様相が見受けられる。以下、契丹國の皇族(宗室)および國舅族(少父房)の諱の実態は下記の通りである。

< 皇族(宗室) >			
景宗(賢)	- 聖宗(隆楮)	- 興宗(宗真)	- 道宗(弘基) - 太子(濬) - 天祚帝(延禧)
隆慶(景宗子)	宗訓(聖宗子)	弘世(興宗子)	淳(道宗甥)
隆祐(景宗子)	宗愿(聖宗子)	弘本(興宗子)	
隆先(景宗子)	宗元(聖宗子 = 重元)		
隆運(漢人*)	宗简(聖宗子)	弘用(宗愿子)	
	宗偉(聖宗子)	弘益(?)	
*は太祖の猶子となった 韓知古の一族の者	宗懿(隆慶子)		
	宗政(隆慶子)		
	宗允(隆慶子)	宗奕(宗室か)	宗誨(宗室か) 宗蕭(宗室か)
	宗教(隆慶子)	宗弼(宗室か)	宗熙(宗室か) 宗顯(宗室か)
	宗德(隆慶子)	宗業(宗室か)	宗範(宗室か) 宗福(宗室か)

< 國舅族(少父房) >	
蕭孝穆(欽愛皇后兄弟・仁懿皇后父)	- 德崇
孝先(欽愛皇后兄弟)	德讓
孝誠	德恭
孝友	德温
孝車(欽愛皇后兄弟・宣懿皇后父)	德良
孝忠	德俊

このほか、國舅大父房でも、同様の様相が見られる世系がある。

契丹國皇族・國舅族の世代別の諱の様相

b. 聖宗皇后の謚名の問題 聖宗皇帝には、在位中皇后であった仁德皇后と、崩御後に仁德皇后を追放して皇太后となり、のちに慶陵に皇后として葬られた欽愛皇后(興宗生母)があるが、欽愛皇后は、『遼史』中では「欽哀」皇后として統一して表記されている。ところが、慶陵から出土した本人の哀冊によると、「欽愛」皇后として表記されていることが判明した。

この問題についても、本人の墓誌には「欽愛」とあることからみて、上記の道宗皇帝の

諱の問題と同様に、埋葬時の諡号は正式には「欽愛」であった可能性が高い。よって、後世の政権において、何らかの意図で諡号を変えたのが『遼史』の記載に残っていると考えることもできる。また一方では、「愛(ai)」を同じ音である「哀(ai)」に変えるなど、極めて周到な意図も伺えることもあり、後世の曲筆の可能性も否定できない。

c. 蕭孝恭墓誌について 蕭孝恭は、蕭姓を名乗るものの、國舅族ではなく、初魯得部(楮特部)の出身である。その墓誌によると「高祖(孝恭の五世祖)以前六祖皆世世拜南宰相」とあり、また孝恭の五世祖の高祖およびその弟、祖父(三世祖)、父、叔父と代々「南宰相」であったと伝える。このうち、父の蕭惟信は『遼史』に列伝があり、惟信とその父が南府宰相であったと伝える。

『遼史』の記載からは、蕭惟信、高八(徳順)の南府宰相任命を本紀の中で確認できる。惟信の五世祖の霞頼は、時期的には契丹國建国当初の時期に当たる。墓誌の示す人名の名は確認できない。宰相については詳細な研究があるものの、確認出来ていない事例がないとは言えない。しかし、遼末期の時期の叙任はかなり記述が詳細になる傾向があり、その中に惟忠の名が見えないのは些か疑問でもある。

<p>&lt; 蕭孝恭墓誌の記述 &gt;</p> <p>楊寧(南宰相) 阿古只(判平州) 徳順(南宰相・兼中書令) 惟信(南宰相・兼中書令・魏國公) 孝恭 蒲打寧(南宰相) 惟忠(南宰相・同中書門下平章事)</p>
<p>&lt; 『遼史』「蕭惟信伝」の記述 &gt;</p> <p>霞頼(南府宰相) 烏古(中書令) 阿古只(知平州) 高八(南府宰相・北院樞密副使) 惟信(南府宰相) (記載なし)</p>

楮特部人・蕭惟信・孝恭一族の系譜

d. 國舅族の墓誌にみられる記述 契丹国では、皇族に対して后妃を輩出する血統が予め定められており、これを「國舅族」と称した。彼らはいずれも「蕭」姓を名乗っている。國舅族構成員の墓誌によく見られる記述として、「其先蘭陵人」というくだりがある。蘭陵という地名は、契丹国の領域内には発見できない。漢地に目を移すと、山東省に蘭陵という地名があり、『太平寰宇記』によると、山東の著姓として蕭姓が挙げられている。南朝・齊と梁の皇帝一族の蕭氏はこの一族で、さらには前漢の功臣蕭何にまで遡るとされる。

『元史』石抹也先伝には、「石抹也先者遼人也。其先嘗從蕭后、拳族入突厥。及后還而族留。至遼為述律氏、号后族。遼滅、改述律為石抹氏。」とあり、隋の蕭皇后が突厥に入り、その末裔が契丹国の國舅族の祖となる太祖耶律阿保機皇后の述律氏であるという、記述すら見られる。

これに対して皇族の耶律氏の場合は「其先漆水人」というのが通例である。「漆水」の指す場所も明確ではないが、後世の『大清一統志』には、〔水+黄〕河上流の支流として「漆水」の名を挙げていることから、こちらは契丹国皇族の出自の地に程近い場所として理解できるであろう。

國舅族の出自に関する各記述の真偽は必ずしも定かではない。しかし、國舅族の構成員の墓誌に多く見られるこの表現は、当時の國舅族蕭氏がその祖先として漢地の蘭陵の著姓・蕭氏を意識していたことはまず間違いない。

契丹人で、しかも皇族とならび最高位の支配一族であった彼らが、漢地の発祥を意識していたことは、一見して極めて奇妙な現象である。この問題については、様々な考え方があるが、定見はみえていない。

## (2) その他の出土文字史料

墓誌以外の出土文字史料として、石刻文、佛教資料、印・牌・符類（金属・石製等）、刻書土器（陶磁器）、があげられるであろう。

石刻文としては、佛教関係のものが圧倒的に多い。先述のように、契丹国後半期、とりわけ興宗朝以降に佛教が盛行したことで、陀羅尼や塔などを造った経緯を記す「造記」「幢記」の形態がかなりの割合を占めている。

また、佛教資料については、先述の山西省應県佛宮寺木塔より発見された大量の經典などの資料群、および内蒙古自治区巴林右旗慶州城内白塔より発見された陀羅尼塔などの大量の資料群がある。應県佛宮寺の資料には、經典のほかに遼版の書籍なども含まれており、版本研究には貴重な資料である。また、慶州白塔の資料の中には、营造に係わった官員の氏名および職名、体制等が記された史料があり、塔の营造体制や当時の政権・地方組織の実態の一端を知る上では極めて貴重である。

印・牌・符類については、内蒙古自治区烏蘭察布盟右前旗出土契丹文字銅印、河北省承德出土金・銀牌、内蒙古自治区巴林右旗で出土した銅牌、ロシア・沿海州地方で出土した契丹文字銀牌、遼寧省博物館所蔵契丹文字銅魚符の例が知られている。印に関しては、後の金代のそれと比 *fig.13* べると、出土量は少ない傾向にある。

蕭興言墓誌拓本 上記出土文字史料を文字数の面で見た場合、石刻文と佛教經典は、比較「其先蘭陵人」 的大量の字数があり、歴史史料に匹敵する情報量を持っている。また、〔蓋之庸 2002〕 印・牌・符類では数文字程度、刻書土器（陶磁器）に至っては一字のみという場合も多い。土器（陶磁器）の場合については、何らかの部署や帰属先等を略記しているとみられる。例えば、刻書土器（陶磁器）でよく見られる事例としては、「官」という刻書銘がある。この「官」の刻字をめぐるのは、前述のように契丹国の官窯を指すかどうか議論はあったが、現在は契丹国官窯の存在を認める説が有力となってきており、そうした場合には、その官窯において作られたことを意味するか、そうでなければ、何らかの官衙等の場所において使用するべく作られた陶磁器であることを意味していよう。

こうした一字のみの刻書土器資料についても、今後出土地等の詳細な情報を丹念に収集・集成することや、陶磁器の生産地・技法などについても分析をすることによって、当時の陶磁器の生産と流通の様相を解明しうる可能性を秘めていると言える。

また、契丹国の文物に記されている契丹文字については、資料数の制約などもあり、大字・小字ともに現状ではまだ完全に解読がなされたとは言い難い。

小字については、内蒙古大学を中心とした研究班の成果があり、字の組み合わせ方法などの解明は進みつつある。また、契丹文の中には「皇帝」など意外に多くの漢語の単語が借用されている状況も垣間見える。また、最近では契丹文墓誌の追加資料がいくつかあり、これらを元にした解読等が新たに試みられている。

## まとめ

以上、契丹国（遼朝）の考古資料の概略について、その要目を列挙した。契丹国時代の遺跡調査は、陵墓を中心に比較的進展している傾向にあるが、都城や窯跡などの調査は件数的には多くなく、今後の調査の蓄積と詳細な報告を必要としている。

出土遺物資料の中では、墓誌（哀册）が目目されるが、文字内容の分析ばかりが先行している感も否めない。遺物として墓誌の製作技法や規格性、装飾技法、意匠工芸の問題やその時代的变化、唐・五代・宋の墓誌との対比など、重要な問題が手つかずのままになっているのが現状であろう。

このほか、窯跡の調査の進展と陶磁器・土器の編年は、今後の同時代の遺跡調査に与える影

響もあり、資料の蓄積と進展が期待されている。

## 主要参考文献

### a. 文献目録・概説

- 島田正郎 『契丹国』〔東方選書〕東方書店 1993  
遠藤和男 『契丹（遼）史研究文献目録 1892～1999』 自費出版 2000  
AsiaGeo 「失われた王朝 契丹」『中国地理紀行』Vol. 14 日本スーパーマップ 2003

### b. 契丹国(遼朝)考古学関係全般

- 鳥居龍蔵 『遼の文化を探る』章華社 1937  
鳥居龍蔵 『考古学上より見たる遼の文化図譜』1～4 東方文化学院東京研究所 1936  
三上次男 『古代東北アジア史研究』吉川弘文館 1966  
三宅俊成 『東北アジア考古学の研究』国書刊行会 1975  
鳥居龍蔵 『鳥居龍蔵全集』6 8 朝日新聞社 1976  
李逸友 『北方考古研究』(一)〔東北亜研究〕中州古籍出版社 1995  
馮永謙 『東北考古研究』(一)〔東北亜研究〕中州古籍出版社 1995

### c. 陵墓に関する調査報告等

- 田村實造・小林行雄ほか 『慶陵』 京都大学文学部 1953～1954  
田村實造 『慶陵の壁画』 同朋舎 1977  
田村實造 『慶陵調査紀行』平凡社 1994  
王健群ほか 『庫倫遼代壁画墓』 文物出版社 1989  
内蒙古自治区文物考古研究所 『遼陳国公主墓』 文物出版社 1993  
内蒙古文物工作隊 『契丹女屍』 内蒙古人民出版社 1985  
河北省文物研究所 『宣化遼墓 - 1974～1993年考古発掘報告 - 』(上・下) 文物出版社 2001  
河北省文物研究所 『宣化遼墓壁画』 文物出版社 2001  
項春松 『遼代壁画選』上海人民美術出版社 1984  
蓋之庸 『叩開地宮之門』〔中国辺境探察叢書〕山東画報出版社 1997  
内蒙古文物考古研究所ほか 「遼耶律羽之墓発掘簡報」『文物』1996 - 1 1996

### d. 都城に関する調査報告等

- 田村・小林ほか 『慶陵』 (上掲)  
遼中京発掘委員会 「遼中京城址発掘的重要収獲」『文物』1961 - 9 1961  
島田正郎 『祖州城』中沢印刷 1956  
巴林左旗文化館 「遼上京遺址」『文物』1979 - 5 1979  
高橋学而 「中国東方地方に於ける遼代州県城 - その平面構造・規模を中心として」『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』 同朋舎 1987  
白石典之 『チンギス=カンの考古学』同成社 2001  
内蒙古文物考古研究所ほか 『内蒙古東南部航空撮影考古報告』科学出版社 2002

### e. 寺院・仏教遺物に関する調査報告等

- 関野貞 『支那の建築と藝術』岩波書店 1938  
竹島卓一 『遼金時代の建築と其佛像』 龍文書局 1944

- 村田治郎 『満洲の史蹟』座右宝刊行会 1944  
井上正 『遼代多宝千仏石幢』京都国立博物館 1973  
国家文物局文物保護科学技術研究所ほか 「山西應県佛宮寺木塔内發現遼代珍貴文物」『文物』  
313(1982-6) 1982  
村田治郎 『中国建築史叢考』仏寺・仏塔編 中央公論美術出版 1988  
山西省文物局ほか 『應県木塔遼代秘蔵』文物出版社 1991  
徳新ほか 「内モンゴバ林右旗慶州白塔發現遼代佛教文物」『文物』1994 - 4 1994  
氣賀澤保規 「房山石経（遼金刻経）所載石経総目録」『中国房山石経の研究』京都大学学術  
出版会 1996

f . 窯業遺跡・陶磁器に関する文献・調査報告

- 李文信 「林東遼上京臨〔水+黄〕府故城内瓷窯址」『考古学報』1958 - 2 1958  
黒田源次 『陶磁全集』14 平凡社 1966  
賈洲傑 「赤峰缸瓦窯村遼代瓷窯調査記」『考古』1973 - 4 1973  
杉村勇造 『陶磁体系』40 平凡社 1974  
三上次男ほか 『世界陶磁全集』13 遼・金・元 小学館 1981  
馮永謙 「遼代官窯的考古新發現」『遼寧省博物館蔵宝録』上海文藝出版社・香港三聯書店  
1994  
今野春樹 「遼の窯址」『博望』2（ツンドラから熱帯まで 加藤晋平先生古稀記念考古学論  
集） 2001  
北京市文物研究所 『北京市龍泉務窯發掘報告』文物出版社 2002

g . 遺物集成・各論

- 鄭紹宗 「承德發現的契丹銀牌」『文物』1974 - 10 1974  
隆化県文物管理所 「河北隆化県發現契丹節度使印」『考古』1982 - 4 1982  
弓場紀知ほか 『世界美術大全集・東洋編』5 五代・北宋・遼・西夏 小学館 1988  
白石典之 「遼・金代における轡と鐙の変化とその背景」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生  
退官記念論 集刊行会 1996  
高橋学而 「ロシア共和国沿海州地方パルチザン区フロロフカ村シャイガ山城出土銀牌考」  
『古文化談叢』 30 下〔古文化談叢發刊20周年・小田富士雄代表還暦記念論集  
( )〕 1993  
徐英章 「銅魚符の由来与契丹文銅魚符」『遼海文物学刊』1993-2 1993  
李興盛 「内モンゴウ蘭察布盟右前旗發現一方契丹大字銅印」『考古』1997 - 8 1997  
劉淑娟 『遼代銅鏡研究』瀋陽出版社 1998  
朱天舒 『遼代金銀器』文物出版社 1998  
韓仁信 「内モンゴウバ林右旗出土遼代道教符〔竹+録〕銅牌和石印」『北方文物』 1999  
羅春政 『遼代書法与墓志』〔遼代文物叢書〕遼寧画報出版社 2002  
羅春政 『遼代絵画与壁画』〔遼代文物叢書〕遼寧画報出版社 2002  
魏占魁 『遼硯』〔遼代文物叢書〕遼寧画報出版社 2002  
陳振微 『遼代銅佛』〔遼代文物叢書〕遼寧画報出版社 2002  
王青煜 『遼代服飾』〔遼代文物叢書〕遼寧画報出版社 2002  
許曉東 『遼代玉器研究』紫禁城出版社 2003

h . 契丹文字・言語学関係各論

西田龍雄 「契丹文字解読の新展開」『言語』10 - 1 ~ 3 1981 のち『アジアの未解読文字』  
大修館書店 1982 に再録  
清格爾泰ほか 『契丹小字研究』中国社会科学出版社 1985  
閻万章 「關於契丹大字墓誌紀年的考釈問題」『遼海文物學刊』1990-1 1990  
即實 『謎林問徑 - 契丹小字解読新程 - 』遼寧民族出版社 1996  
愛新覺羅烏拉熙春 「契丹大文字と女真大文字」『立命館文学』560 1999  
愛新覺羅烏拉熙春 「契丹小字の表音の性質」『立命館文学』565 2000  
愛新覺羅烏拉熙春 「契丹小字的語音構疑」『立命館文学』577 2002  
愛新覺羅烏拉熙春 『耶律敵烈墓誌』與『故耶律氏銘石』所載墓主人世系考』『立命館文学』  
580 2003

i . 墓誌に関する史料集成

羅福成 『遼陵石刻集録』奉天図書館 1934 のち 台湾国風出版社 1974 および 香港古佚  
會 1992 より復刊  
陳述 『全遼文』中華書局 1982  
向南 『遼代石刻文編』河北教育出版社 1995  
閻鳳梧 『全遼金文』山西書籍出版社 2002  
蓋之庸 『内蒙古遼代石刻研究』内蒙古大学出版社 2002  
中国国家図書館善本金石組 『遼金元石刻文献全編』(全3冊) 2003

j . 歴史史料全般・工具書

若城久治郎 『遼史索引』東方文化学院京都研究所 1937  
楊家駱 『遼史彙編』(全11巻) 台湾鼎文書局 1968  
元・脱脱等 『遼史』中華書局 1974  
島田正郎 『遼史』〔中国古典新書〕 明德出版社 1975  
中華書局 『遼史人名索引』 1982  
宋・葉隆禮 『契丹國志』上海古籍出版社 1985  
譚其驤 『遼史地理志ヲ釈』〔正史地理志ヲ釈叢刊〕安徽教育出版社 2001

k . 展示会図録等

旭通信社 『中国十大発掘文物 北方騎馬民族の黄金マスク展』 1996  
中国歴史博物館ほか 『契丹王朝 - 内蒙古遼代文物精華 - 』中国蔵学出版社 2002  
陳成軍ほか 『凝固歴史瞬間 - 「契丹王朝 - 内蒙古遼代文物精華展」展覽設計』吉林美術出版社  
2003

l . 契丹国(遼朝)史に関する各論研究文献〔主要分抜粋・著者五十音順〕

津田左右吉 「遼の制度の二重體系」『滿鮮地理歴史研究報告』5 1919 のち『津田左右吉全  
集』岩波書店 1964 に再録  
愛宕松男 『契丹古代史の研究』〔東洋史研究叢刊〕東洋史研究会 1954  
愛宕松男 『愛宕松男東洋史学論集』3 キタイ・モンゴル史 三一書房 1990  
神尾弼春 『契丹佛教文化史考』滿洲文化協会 1937  
島田正郎ほか 『遼律之研究』 大阪屋書店 1944  
島田正郎 『遼制之研究』 中沢印刷 1954 のち汲古書院より復刊 1973  
島田正郎 『遼代社会史研究』 三和書房 1952 のち巖南堂書店より復刊 1978

- 島田正郎 『遼朝官制の研究』創文社 1978  
島田正郎 『遼朝史の研究』創文社 1979  
杉山正明 「北方民族の台頭 - 遼と西夏」『新版世界各国史』3 山川出版社 1998  
高井康典行 「東丹国と東京道」『史滴』18 1996  
高井康典行 「オールド(斡魯朵)と藩鎮」『東洋史研究』61-2 2002  
高橋学而 「遼代の従家戸を構成の主体とする頭下州について」『古文化談叢』42 1999  
武田和哉 「遼朝の蕭姓と國舅族の構造」『立命館文学』537 1994  
武田和哉 「契丹国(遼朝)の北・南院枢密使制度と南北二重官制について」『立命館東洋史学』24 2001  
武田和哉 「契丹国(遼朝)道宗朝の政治史に関する一考察 - 慶陵出土の皇后哀册の再検討 - 」  
『立命館  
大学考古学論集』2003  
谷井俊仁 「契丹佛教文化史論」『中国房山石経の研究』京都大学学術出版会 1996  
田村實造 『中国征服王朝の研究』上・中・下〔東洋史研究叢刊〕東洋史研究会 ~ 1985  
野上俊静 『遼金の佛教』平楽寺書店 1953  
松井等 「契丹勃興史」『満鮮地理歴史研究報告』1 1915  
松井等 「宋対契丹の戦略地理」『満鮮地理歴史研究報告』4 1918  
松田光次 「遼朝漢人官僚小考 - 韓知古一族の系譜とその事跡」『小野勝年博士頌寿記念東方学論集』  
龍谷大学東洋史研究会 1982  
森安孝夫 「渤海から契丹へ - 征服王朝の成立 - 」『東アジア世界における日本古代史講座』  
7 学生社 1982  
劉浦江 「遼朝国号考釈」『歴史研究』2001-6 2001

m. その他本発表に利用した文献〔著者五十音順〕

- 臼杵勲 「靺鞨文化の年代と地域性」『日本と世界の考古学』雄山閣 1994  
杉山正明 「中央ユーラシアの歴史構図」『岩波講座世界歴史』11 岩波書店 1997  
妹尾達彦 「中華帝国の分裂と再生」『岩波講座世界歴史』9 岩波書店 1999  
増井寛也 「初期完顔政権とその構造」『立命館文学』418~421 合併号 1980  
松浦茂 「金代女真氏族の構成について - 金史百官志みえる封号の規定をめぐって - 」『東洋史研究』36-4 1977